

“My School” in 2030

実社会を学校で学ぶ「Society in school」(Name / Concept) (学校名/コンセプト)

<p>Mission Statement 学校のミッションステートメント・理念</p>	<p>基本的に、東北などの人口激減地域の課題意識を持った学校。「Care・Work・Art」の三位一体で、地域のコアとなる学校をつくる。この新しい学校では、社会（世界）の縮図を学校の中に創り上げ、「地域のコミュニティ機能を生み出す学校」というミッションのもと、「社会づくりの実験室」として機能し、実社会に影響を及ぼすことを目的とする。</p>
<p>Of the various challenges the world will face in 2030, my school will address... 2030年、世界が抱える多くの課題の中で、この学校が解決目指す課題は・・・</p>	<p>1. 人口減少による地域の衰退……Care 日本、特に東北はこの30年間で人口が激減する。地域のコミュニティ機能を維持するために、学校教育と地域が相互にCareする関係が必要になってくる。</p> <p>2. 社会と学校の乖離状態……Work 現状では、学校は実社会に対して固く門を閉ざしている。実社会と結びつき、学校と仕事Workをつなぐことは急務である。</p> <p>3. 学校に通う意味の希薄化……Art インターネットの進歩により、学校に通い先生から教える意味が希薄になってきている。<u>心理的な一体感を得たり、個性を強調したりする芸術Artを学校教育の柱の一つとする。</u></p> <p>4. 学校の孤立化……Network 現状の学校は、個々バラバラである。東北スクールでは、複数の学校の先生や生徒が学び合い、異質性・多様性を学び得ることができた。学校がネットワークでつながり、多様性を受け入れることが必要だ。</p> <p>5. 人材育成の意識の低迷……competency 学校は保守的であり、社会の抱える課題に対応できていない。日本の学校の教科主義を改め、<u>コンピテンシーベースの学びに変えていく必要がある。</u></p>
<p>To address these challenges in 2030, my school will aim to develop these competences.... 上記の課題を解決できる人材育成のため、この学校が開発を狙うスキル・能力は・・・</p>	<p>1. 地域の一員として持つべき責任 人口減少期にあつて子ども・若者はまさしく地域の宝である。生徒を、<u>地域を維持し発展させる次世代の主体</u>として育てる。同時に、海外とも交流を進め、<u>地球市民としての自覚</u>を高めていく。</p> <p>2. 仕事づくりによるアントレプレナーシップ 学校の中に「ワークスペース」を設置し、生徒の発達段階に応じて仕事づくりを行う。ものの入手や加工、技術開発やリソースの管理、商品開発やマーケティングなどを体験できるようにする。これによって<u>働くことの意味やストラテジー</u>を学ぶ。</p> <p>3. 創造力を育てるイベントづくり イベントづくりは、その<u>企画力や表現力、創造力、チームワーク</u>を育てる一方、人々に<u>出会うの場を提供し、活力を与え、思いを共有</u>することができる。これによって学校は地域の「文化センター」としての役割を果たすことになる。</p> <p>4. ケアし合う関係づくり 今後人口減少とともに経済的にも厳しい状況となっていく中で、生徒ばかりか家族や地域までケアの対象となる可能性が出てくる。日本人の集団意識や道徳観、学校内外のスタッフによる地域生活指導を通した生徒や地域のケアをさらに発展させる。</p> <p>5. プロジェクト学習を通したスキル開発 <u>「課題発見・解決能力」「クリティカル・シンキング」「コミュニケーション能力」「クリエイティビティ」「チームワーク」「マネジメントスキル」「プレゼンテーションスキル」「ICT教育」「成功体験」「点と点を結ぶ力」</u></p>

To effectively run this school... この学校を具現化（効果的に運営）するための	
School system 学校システムは・・・	<p>○地域に開かれた学校とする。幼、小・中・高の発達段階に合わせた地域連携を可能にするため、校舎を老人ホームや公民館、文化センター、工場（手工業）としても活用できる多目的建造物(ワークスペース)とする。これは空き教室の利活用や新設の場合もあり得る(ふたば未来学園高校では、復興拠点施設を併設)。</p> <p>○ビジネスマン、技術者、NPO、農民などあらゆる者が「兼業教師」である。様々な立場、職業、考え方を持つ大人が、地域が、子供の「教育」に携わる。専門家教師はそうした多様な学びをアレンジし、学びの質を高める責任を持つ。また現実社会から子どもたちを守る役割も担う。</p> <p>○学校はネットワーク化して結びつき、実際に学校間で生徒も先生も動き回り、個々の学校の特徴的な学びの体験を交換し合うことができる。複数の学校が生徒レベル・教員レベル・場合によっては保護者レベルで共同研究を行ったり、共同プロジェクトを動かしたりする。</p> <p>○学校のカリキュラムづくりには、生徒や保護者も参画する。とくに生徒代表はカリキュラムを運用する上でも発言力を持つ。学習指導要領の学校裁量部分を拡大し、学びと自治を結びつける。</p>
Classroom 授業形態は・・・	<p>基礎をしっかり学ぶ期間、グループで Work プロジェクトを展開する期間、他校を訪問したり訪問を受け入れる交流期間、地域の人たちにイベントを提供する Art プロジェクト期間、海外体験期間などをおき、季節ごとに特徴のあるカリキュラムにする。ICT もこなすが、昔ながらの座学もちゃんとする。プロジェクト学習が主体となるが、プロジェクトマネジメントもしっかり学ぶ。一つの授業には必ず複数の大人が教師として参加し、授業中に教師同士で議論したりもする。これによって、生徒達は多視点的な学びが可能となる。</p>
Pedagogy 教え方・学習方法は・・・	<p>○教師は「先生」ではなく、「GL-グループリーダー」と呼ばれ、知識を与えるのではなく、一緒に試行錯誤しながら成功に向けてクラス＝グループを引っ張って行く存在である。(イェナプランから)</p> <p>○あらゆる学びの成果は、作品集としてまとめられ、発表したり、共有することになる。それは学びは Work であり、Art であるという考え方に基づく。いわば、授業は作品をつくるためのプロジェクトとして組み立て直される。(フレネ教育から)</p> <p>○この学校の学びのプロセスは、「基礎から応用」と「応用から基礎」の二つのモードが存在する。前者は現在の学校と同じである。後者はまず、現実を体験し、問題を掘り下げ、細かなテーマへ落とし込むというやり方である。言わば実践から一般原則へ還元する「振り返り」のプロセスを重視する。</p> <p>○この学校で学ぶのは生徒ばかりではない。教師も管理職もゲストスピーカーも重要な学びの主体となる。一定期間ごとに教師の学んだ内容をレポートにまとめ、生徒や地域の人たちの前で報告しなければならない。生徒達は、教師の学ぶ姿を見て、学ぶことの重要性を心に刻む。教師には現代社会に対する問題意識が強く求められ、教員養成課程においても「教育におけるイノベーター」としての資質を伸長されなければならない。</p>
Resourcing (financing/ expertise) 経営（収入源、経験（現物）など含む）	<p>まずは教育特区を設け、実験学校をつくる。予算は建物や人件費などの基礎部分は自治体負担とし、プロジェクト学習など自由に使える部分は民間から資金調達する。ワークスペースなどの運営は民間と共同する。国から経営資金を出してもらって代わり、教育的革新にあたる学校としてデータの提供を行う。生徒の教育条件を安定させるために国がセイフティネットを定める一方で、民間的な手法も大いに採り入れ、学校を活性化させる。既存の学校予算＋5000万円ほどの教育研究費を必要とする。</p>
参考にした資料・文献	<p>『2050年の世界—英『エコノミスト誌』は予測する』、J・アタリ『危機とサバイバル—21世紀を生きぬくための〈7つの原則〉』、セレストン・フレネ『手仕事を学校へ』、ピーター・センゲ『学習する学校』</p>

